

## 身体知研究の方向性

橋詰 謙（大阪大学）

### 定義

筆者は近年、スポーツをはじめとする（身体的）スキルを研究テーマとしてきたが、「身体知」という言葉については、余り言及してこなかった。「スキル」に関しては、国際高等研究所「スキルの科学に関する学際的研究班」（代表：岩田一明氏）における定義、すなわち「特定領域での経験や訓練により獲得された自発的な課題解決能力」（最後の部分は「高度な行為の遂行能力」と言い換えることができる）と定義している。「身体知」については「スキルを支える知」ということで、「経験や訓練により身体に刻み込まれた（暗黙的な）課題解決のための知恵・コツ・身体感覚」のようなものと考えている。

以下に身体知を理解するのに重要と思われることを挙げた。

### 行為

スキルは行為に宿る。行為とは、私たちを取り囲む環境と相互作用しながら、社会的意味や価値を有する課題を解決する行動である。行為は行為者・環境・課題の関係で成立する。したがってスキル（および身体知）を理解するためには、環境（行為の文脈も含む）の性質、課題の本質、行為者の特性と行為内容を知ることが必要となる。行為は多様な動作から構築されるが、動作のみを分析するだけではスキルおよび身体知の十分な理解には至らない。

### 課題のタイプ

スキルには主に、いわゆる「クローズドスキル」が要求される課題と、「オープンスキル」が要求される課題がある。前者は巧緻性や複雑性が非常に高い成果が求められ、後者は環境変動に対応した安定した成果が求められる。しかしトップアスリートには、この両者が求められることが多い。体操競技などはその典型である。

### トレードオフ

課題には必ずトレードオフがある。精度を得ようとすれば、スピードを抑える必要がある。高いスピードを維持しようとすれば、スタミナ低下は避けられない。二兎を追う者はアスリート。

## 周辺資源

スキルは身体の内側に閉じたものではない。行為者の周囲に存在する資源を上手に利用している。利用されるものは環境に埋め込まれたアフォーダンスであり、ダイナミクスである。これらをどう利用するかは身体知の重要な一面である。

## 制御

行為には厳密な制御が必要な部分と、環境や身体のダイナミクスに委ねてよい部分がある。環境や身体のダイナミクスを有効に利用することで、効率的で効果的な行為が遂行できる。これも身体知として培うべきものである。

## 身体感覚

トップアスリートは自分が身体をどのように動かしているか、手足や全身の姿勢がどうなっているかというに極めて敏感である。身体の時間的・空間的・力的な感覚こそ、身体知の重要ポイントである。

## カスタマイズ

トップアスリートは戦うためのベースとなる部分の上に、身体感覚を駆使してカスタマイズした独自の対応能力を構築している。カスタマイズされるのは主動作だけでなく、予測的な姿勢応答や先取りの動作もある。どこがどのようにカスタマイズされたのか、それはどのような知によるものなのか？

## 練習

求めるのは自動化（運動プログラム化）なのか、対応方法の探索なのか？

## 教えられるもの

たぶん、戦うためのベースとなる部分は何とか教えられる。しかし対応能力は独自に学ばなければならない（カスタマイズしなければならない）。

## 適応的熟達者の世界を知る術

インタビュー、エスノグラフィー：例えば「自動車修理工・ウイリーの知恵」

そして構成論、行為論へ